

学生を成長させる大学とは

筑波大学 大学研究センター 金子 元久教授

近年は大学の教育力に大きな注目が集まっており、大学教育を通じて学生が成長することが期待されている。ただし、学生を成長させる大学教育を構築するためには、大学における学生の成長が何を意味しているのか、あるいは大学教育のどの側面がどのように学生の成長を促しているのかを考察することが不可欠だ。そこで、筑波大学の金子元久教授に、大学における学生の成長をどのように捉え、どのような大学教育で学生は成長するのか、お話しいただいた。

今後の大学教育で求められる 学生の人格的な成長

近年、大学教育を通じて学生に何を身につけさせるか、という点に注目が集まっています。

大学では「**専門的知識・技能**」を軸とした教育が行われますが、同時に現在の大学は、青年期という人格的発達において重要な時期を過ごす場でもあります。そこで、専門領域にかかわらず求められる「**汎用能力**」を身につけるとともに、「**自己認識**」を深めることも、大学教育の重要な役割となっています。「**自己認識**」とは、一般的には「**人格形成**」や「**人格的な成長**」と呼ばれるもので、①自己・社会把握、②意味づけ、③目的・一貫性の3つの視点で捉えることができます<図表1>。

しかし、大学にはこれまで、「**学生の人格的な成長**」という視点が希薄でした。11世紀にヨーロッパ最古の大学、ボローニャ大学が設立して以降、大学は勉強したい人が学びに来る教育機関として存在し、学生の多くは成人でした。こうした中世以降の伝統から、**大学には「大学生はオトナであり、自分でやりたいことがわかっており、自ら進んで勉強するはずだ」という前提があり、学生の成長のための教育は行ってきませんでした。**と

Profile 金子 元久 (かねこ・もとひさ)

筑波大学大学研究センター教授。

東京大学教育学部卒、同大学院教育学研究科修士、シカゴ大学Ph.D。東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長、国立大学財務経営センター研究部長等を経て現職。東京大学名誉教授。中央教育審議会委員、日本学術会議会員、日本高等教育学会会長も務める。



が現在、大学の実態は、そうした前提と乖離しています。

一方で、近年は学生の**人格的成長**について、**大学教育への期待が高まっています。**

日本ではこれまで、社会人として働く中で人格を形成する過程が有効に機能していました。働き始めた直後から新人研修などを通して、学生時代までの価値観をいったん崩し、改めてその組織に合わせた人材育成が行われてきました。しかし、それは**終身雇用を前提とした雇用形態**だったからこそ可能だったもので、現在の日本では、企業等にそのような余裕はありません。

しかも、産業構造が転換し変化のスピードが速くなる中で、仕事が多様化し、かつ入社しても長く働くことができるかどうかは不透明な時代となったため、個々人のキャリアの予測も難しくなっています。そうすると、**今**

<図表1> 学生の知識・技能

A. 専門的知識・技能	B. 汎用能力	C. 自己認識
A① 具体的知識 a. 特定の事実、名称に関する知識 b. 特定の知識を運用する能力、その位置づけの知識 c. 一定の分野における一般的な理論、一般化、構造把握についての知識	B① 基礎スキル : 読み書き能力、勤労習慣	C① 自己・社会把握 : 社会への見方、自分自身の特性の把握
A② 理解と応用	B② 社会スキル : コミュニケーション能力、対人関係能力	C② 意味づけ : 意味の体系(イデオロギー、価値体系)の内面化
A③ 分析、総合、評価	B③ 論理的思考	C③ 目的・一貫性 : 自分の役割・目的の把握、目的と現在の行動の一貫性、意欲

(『大学教育の再構築 学生を成長させる大学へ』(金子元久著、玉川大学出版部、2013) p100~104より作成)

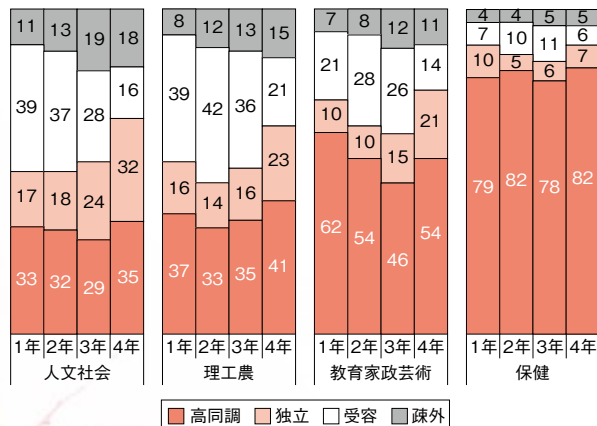
後の社会では、自分が何をしたいのかを明確に意識し、置かれている状況を的確に判断し行動する力が求められるようになってきます。確固たるアイデンティティがないと、社会の中で生きていくことが難しい時代が到来しつつあるのです。

そのため大学には、学生のアイデンティティを確立し人格形成につなげる、つまり学生を成長させる教育を行うことが、これまで以上に求められているのです。

しかし、私たちの行った「全国大学生調査」^(注1)によると、大学教育を通じてアイデンティティを獲得できていない学生が相当数いることが明らかになりました。

学生を、①自分のやりたいことが明確で、大学の授業に期待している「高同調型」、②やりたいことは明確だが、大学には期待しない「独立型」、③やりたいことが決まっていないので、大学で見つけたいとする「受容型」、④やりたいことも決まらず、大学にも期待していない「疎外型」の4タイプに分類すると、1年次は「受容型」が約4割と最大です。学年を重ねるにつれ「受容型」の割合は減る傾向があります。その際、「高同調型」が増えていけば大学は学生の成長にプラスに参与していると見なすことができますが、実際にはあまり変わりません。むしろ、卒業までに一定の自己認識を形成するが、大学での学修とは必ずしも関わらない「独立型」や、自己認識が明確でなく大学での学修にも積極的でない「疎外型」が増えています<図表2>。これはつまり、大学が十分に学生の人格的な成長を促せていないことを表しています。

<図表2> 学生の類型別分布 (%) の学年別比較



(「大学教育の再構築 学生を成長させる大学へ」 p126図表5-2より)

(注1) 全国大学生調査…日本学術振興会科学研究費補助金(学術創成研究費)『高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析』(2005年度～2009年度、研究代表者 金子元久)によって実施。全国127大学、48,233人が回答。

「不連続」を経験することで成長を促す社会的な装置としての大学

学生の人格的な成長について、大学生の多くを占める青年期の発達の特徴に注目して考えてみましょう。

アメリカの発達心理学者であるエリクソンは、人生の周期を8つの発達段階に分け、それぞれにおいて重要な特性を身につけていくと論じています。このうち青年期は、それまでの環境とは全く異なる「不連続」な状況を経て、新しいアイデンティティを獲得し、オトナへと成長する時期だと考えられています。

「不連続」な状況の中では、例えば新しい知識を得たり、他人の考えに触れたりする中で、それまで自分が信じてきたこと(「思い込み」)が根底から覆される「相対化」が起こります。そしてその上で、自己を再び「統合」して新たなアイデンティティを作っていくことになります。

欧米の大学では以前から、古典を題材に、教師が学生と対話を重ねる中で「思い込み」に気付かせて「相対化」させるとともに、一定の考え方を伝える中で「統合」を促す教育を行ってきました。そうした過程を通じて知的訓練を行うのが、本来のリベラル・アーツです。

またエリクソンは、青年期は自己認識が揺らぐ脆弱な時期だからこそ、社会的な義務や責任を猶予(モラトリアム)するなどの「保護」が必要であるとしています。

そうした「保護」の役割は、伝統的に学生寮などが担ってきました。例えば、多くが全寮制であった日本の旧制高等学校はその好例で、社会的な義務や責任を猶予されている環境で、同世代の学生で集団生活を行い、ある程度自由に活動し試行錯誤する中で、若者をオトナへと成長させました。また、欧米には現在も寮生活を重視する大学が多くあります。寮生活自体は大学教育には含まれないものの、親元から離れるという「不連続」の状況を作るとともに、ある程度自由に活動できる環境において学生を「保護」する役割も果たす点で、重要な意味を持っていたのです。

学生の成長に寄与してこなかった現代日本の大学教育

現代の日本の大学に、同様の機能はあるのでしょうか。大学進学率が低かった時代には、学生は大学に合格するために受験勉強に励むという、共通した経験を持っていました。これも一種の「思い込み」です。しかし、高

高等教育のユニバーサル化が進んだ現在、入学者選抜が十分に機能していない大学も増え、相対化されるべき「思い込み」すら持たない学生が増えています。そうすると、「相対化」も「統合」も起こらず、新たなアイデンティティは生まれません。

旧制高等学校や欧米の大学では学生寮が「不連続」をもたらすきっかけとなっていました。現在の日本では、寮生活をする学生はごく少数です。それにもかかわらず、「大学生はオトナである」という建前だけを持ち続け、大学教育において「不連続」を感じさせる機会を設けてこなかったため、学生には成長するきっかけがあまり与えられてきませんでした。

その代わりに、サークル・部活動での先輩後輩の上下関係や、アルバイト先などでの経験が、成長への通過儀礼として働いていると考える人もいます。しかし、サークル・部活動やアルバイト先には、そこから新しい自我への「統合」を促す、教師にあたる存在がいない場合も多いため、学生を成長させる仕掛けという点からいえば、不十分と言わざるを得ません。

教養教育にも課題がありました。日本の大学の場合、アメリカのリベラル・アーツなどとは異なり、授業は大人数の講義形式のものが多く、教師との対話はあまりなされていませんでした。そのため、視点を広げる意義はあっても、学生に「相対化」や「統合」を促すような「深さ」を伴わない場合もあったのです。

そこで、日本の大学では「深さ」を追究する仕組みとして、卒業論文（以下、卒論）やゼミが位置づけられました。特に卒論は、先行研究の調査や教師の指導を通じて、自分の考えの未熟さを痛感し、それまでの自分と決別するきっかけとなる意味で効果が大きいと考えられています。ゼミも教師や他の学生との深い対話を通して、自分の誤りに気づき、改めて考え直すことで、成長につながる可能性があります。

ただし、卒論やゼミは教師にも学生にも非常に手間がかかるため、実施していない大学も多くあります。また、実施していても効果的に指導できていない場合もあります。卒論を書くためには低学年次から卒論執筆に向けた学修が必要です。ゼミにしても、自分で真剣に勉強しなければ、文献講読や対話だけで自然に考えが深まっていってしまう。卒論やゼミを実施してさえいれば学生が成長するというわけではないのです。

ボランティアや留学などの経験と同時に主体的に学ばせる授業が求められる

それでは、学生の成長を促すためには、どのような大学教育が求められるのでしょうか。

基本となるのは、いろいろな経験を積ませるように工夫されたカリキュラムを構築することです。課題を与えて、自ら調べ、学ばせると同時に、レポートにコメントを返すなど、教師と学生の対話を成立させる努力を続けることで、学生は自分の誤りに気づき、もう一度考え直すという経験を積んでいくことができるからです。アクティブラーニング、PBL^(注2)、反転授業^(注3)といった試みは、いずれも授業時間外に学生自身が学ぶように誘導する授業の試みであり、きちんと実施できれば、学生の成長には一定の効果が期待できます。その意味で、授業以外の学修時間は、学生を成長させる取り組みを行っているかどうか、見極める指標になります。

ボランティアや海外留学、インターンシップ等も、自己の相対化には極めて大きな意味を持ちます。自分の価値観が全く通用しない環境に身を置くことで、自己を見つめ直す時間になるからです。特に言葉があまり通じず、考え方が大きく異なる生活環境で過ごす海外留学は、学生の成長の大きなきっかけとなるはずですが。

ここで大切なことは、そうした授業や正課外のプログラムが、学生の成長という観点からきちんと意図して組み立てられ、計画的に行われていることです。

また、一人ひとりの学生へのきめ細やかな支援も、自己認識が揺らぐ時期の「保護」の役割を果たす意味で、学生の成長には有効と言えます。

現在、そうした取り組みは、比較的 student 数が少ない大学で充実している傾向があります。高校生の大学選びにおいては、入学定員が多く知名度の高い大学ばかりでなく、入学定員があまり多くない大学についても、教育内容に注目して、本当に成長できる大学かどうかを見極めていくと良いでしょう。

なお、大学入学後は、自ら学ぶことを心がけたいものです。どの大学にも面白い授業があり、興味深い教員がいるはずですが。たとえ、第一志望の大学でなかったとしても、自分から学びを求めることで、成長の扉は開かれるのです。

(注2) PBL…Problem / Project Based Learningの略。学生自らが具体的な課題を見つけ、グループでその解決に向けた学修を行う授業のこと。

(注3) 反転授業…従来の授業と宿題の役割を反転させた授業のこと。自宅でパソコンやタブレットで授業動画を見て基本的な内容を学び、教室では個々の課題解決や発展問題に取り組んだり、議論をしたりする方法がある。